

ステロイド糖尿病に対し 週1回GLP-1受容体作動薬が奏効した 針恐怖症の1例

岡崎由希子, 田島亜佳里, 門脇 孝
東京大学医学部附属病院 糖尿病・代謝内科

Key words ▶

ステロイド糖尿病
GLP-1受容体作動薬
針恐怖症

要 旨

69歳女性。ブドウ膜炎に対しプレドニゾロン20mgの投与開始3ヵ月後、随時血糖値918mg/dL、HbA1c 16.1%となり、ステロイド糖尿病の診断にて緊急入院となった。強化インスリン療法の後、週1回GLP-1受容体作動薬（GLP-1RA）デュラグルチドに変更し、良好な血糖コントロールを得た。GLP-1RAはステロイド糖尿病の病態に適合した有用な治療手段であると同時に、インスリン治療に伴う問題点を解決し得る治療法であると考えられた。またデュラグルチドのデバイスは自分で針を取り扱う必要がない構造であるため、針恐怖症の患者でも自己注射が可能であった。

○はじめに○

ステロイドは強力な抗炎症作用、免疫抑制作用などを有するため多数の疾患治療の切り札になる反面、ステロイド糖尿病などの副作用の発現も多い。ステロイド糖尿病に対する薬物療法はインスリンの複数回投与が一般的であるが、われわれは週1回GLP-1受容体作動薬（GLP-1RA）であるデュラグルチドを使用し良好な血糖コントロールを得たので報告する。また本症例は針恐怖症であったが、デュラグルチドのデバイスは針恐怖症患者に対する心理的負担の軽減に有用であった。

○症 例○

症例：69歳女性

主訴：口渇

現病歴：過去の健診では血糖値の異常を指摘されたことはなかった。2016年4月ブドウ膜炎にて当院眼科受診し、5月19日よりプレドニゾロン（PSL）20mg内服開始となった。この時随時血糖値129mg/dL、HbA1c 6.0%であった。ブドウ膜炎の経過は良好でありPSLは漸減されていた。8月25日、眼科定期外来受診時の血液検査にて随時血糖値918mg/dL、HbA1c 16.1%、翌日の当科初診外来にて随時血糖495mg/dL、尿ケトン（2+）であり、同日当科緊急入院となった。

既往歴：18歳：虫垂炎（手術）、33歳：子宮内膜症（手術）

家族歴：特記すべきものなし

生活歴：喫煙：なし、飲酒：機会飲酒
食事：通常は1300kcal程度、入院前の1ヵ月間は、お茶、牛乳300mL、菓子などを追加摂取

運動：散歩を1日30分（週4回）入院前の1ヵ月間は運動せず

体重歴：最大体重68歳時：52kg [BMI (body mass index) 25.6kg/m²]、入院時43.9kg (BMI 21.6kg/m²) (入院前の1ヵ月間で6.0kg減少)

入院時処方：プレドニゾロン（5mg）2T1×（8月25日～）、ファモチジン（20mg）2T2×、リセドロン酸ナトリウム水和物（17.5mg）週1回1T1×